

## ダニエル書2章31-49節 「世界帝国の隆盛」

### 1A 人の像 31-35

### 2A 諸帝国の隆盛 36-45

#### 1B 四つの帝国 36-40

#### 2B 分裂した国 41-43

#### 3B 天の神の国 44-45

### 3A ネブカドネツザルの賛辞 46-49

#### 本文

今晚は2章31節から読んでいきます。私たちは、前回、2章前半にて、ネブカドネツザルが夢を見て、それを解き明かすだけでなく、その前に夢を伝え、それから解き明かしなさいとの要求を出したところを読みました。それは、王に助言する呪法師、呪文師たちにとってはできない難題であり、「2:11 肉なる者と住まいをともにされる神々以外に、それを王の前に示すことができる者はありません。」と言いました。王は怒り長けり、すべての知者を殺せと命じましたが、ダニエルは王の心のうちを知るべく、しばらくの時を与えてくださるようお願い、祈り求めました。それで、夜に天の神から啓示が与えられたのです。ダニエルは、王の前でへりくだって、しかし大胆に、「2:27-28a 王が求めておられる秘密を王にお示しすることは、知者や、呪文師、呪法師、占星術師などにはできません。2:28a しかし天に秘密を明らかにするひとりの神がおられます。」と証しました。天の神だからこそ、お見せになった夢です。

そしてその夢は、「28b この方が終わりの日に起こることをネブカドネツザル王に示されたのです。」というのです。ネブカドネツザルが生きていた紀元前六世紀から今に至るまで、そして終わりの日ですから将来に至るまでの、壮大な神のご計画ということですから、では、早速見ていきましょう。

### 1A 人の像 31-35

<sup>31</sup> 王よ。あなたが見ておられると、なんと、一つの巨大な像が現れました。この像は巨大で、異常な輝きを放って、あなたの前に立っていました。その姿は恐ろしいものでした。<sup>32</sup> その像は、頭は純金、胸と両腕は銀、腹とももは青銅、<sup>33</sup> すねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土でした。



巨大な像であり、異常な輝きを持っていました。恐ろしさを抱かせるものです。けれども、輝きは、頭からつま先へと次第になくなっていきます。金から銀、青銅、鉄、最後は鉄と粘土が混じった状

態です。

<sup>34</sup> あなたが見ておられると、一つの石が人手によらずに切り出され、その像の鉄と粘土の足を打ち、これを粉々に砕きました。<sup>35</sup> そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金も、みなともに砕け、夏の脱穀場の籾殻のようになり、風がそれを運んで跡形もなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土をおおいました。

この夢の次の特徴は、「人手によらず切り出された石」です。この石が、鉄と粘土の混じった足のところにぶつかります。すると、これまでの頭からのみな共に砕け散り、脱穀上のもみ殻のようになります。夏とありますから、相当、乾燥したところでもみ殻が、風で飛ばされていることがわかります。聖書では、神が罪に対して、火による裁きを下される時に、この表現が使われますね。バプテスマのヨハネは、「マタ 3:12 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」と言っています。

そして、この石が大きな山となって全土をおおうところで終わります。山というのは、力や権威、王を表すものとして、他の聖書の箇所が出てきます。

## **2A 諸帝国の隆盛 36-45**

### **1B 四つの帝国 36-40**

<sup>36</sup> これがその夢でした。私たちはその意味を王の前に申し上げましょう。<sup>37</sup> 王の王である王よ。天の神はあなたに国と権威と力と栄誉を授け、<sup>38</sup> また人の子ら、野の生き物、空の鳥がどこに住んでいても、これをことごとくあなたの手にて与えて、治めさせられました。あなたはあの金の頭です。

この人の像は、イスラエルが神の立てた王国として一時的に退けられた後の、異邦人が世界を支配する帝国の姿を示したものでした。聖書には、舞台が、メソポタミア地方からエジプトにかけてのところなので、そこに表れた帝国です。金の頭は、ネブカドネツアル自身の築いたバビロン帝国を表していました。金の頭というのは、彼に与えられた「国と権威と力と栄誉」を示しています。実に、人のみならず動物の世界も、バビロンの支配を感じざるを得ないほどの強い主権でありました。時代的には、紀元前 605 年から 539 年まで続きます。

ところでここで大事なのが、このような国と権威と力を与えたのは、紛れもなく天の神だということです。このことについて晩年のネブカドネツアルは、痛い思いをして教訓を学びます。自分の権威、自分の力だと自画自賛した時に、草をはむように、獣のようにされてしまったのです。そして、知性が戻ってきた時に、真っ先に口から出たのは、神への賛美でした。

<sup>39</sup> あなたの後に、あなたより劣るもう一つの国が起こり、その次の第三の青銅の国が全地を治め

るようになります。

バビロン帝国は、メディア・ペルシア連合軍が都バビロンを倒すことによって終わりを告げます。そして、メソポタミアから今のトルコ、アジアへ、そして、南はエジプトにまで及ぶ巨大な帝国を、初代ペルシア王、キュロスが築きます。紀元前の 536 年からペルシア帝国が始まります。(539 年から 536 年は暫定的な支配で、メディア人のダレイオス王が治めますが、そのことについては 6 章で見ることになります。)

ここでの特徴は、「あなたより劣る」とあるところです。ネブカドネツアルは、絶対君主でした。彼の言ったことは、そのまま法令になるような権力です。ペルシアの国では、法令が重んじられました。王をもってしても、それを変えられない法令でありました。6 章にて、王をしてさえ法令を変えられない姿が出てきます。エステル記においても、クセルクセス王が法を変えられない姿が出てきますが、同じです。権力が王の中に少し、なくなっていました。

第三の、「青銅の腹と太もも」ですが、これはギリシアです。紀元前 330 年から 66 年まで続きます。ギリシアのマケドニアの王、アレクサンドロスが当時知られていた世界を制覇しました。だから、ここでダニエルが「全地を治める」と解き明かしています。具体的にはギリシアとアジア(今のトルコ)、そして南下してイスラエルの地域、そしてエジプトまで征服しました。それから、ペルシアを破り、遙かインドまで東方遠征を行ないました。

<sup>40</sup> そして第四の王国ですが、それは鉄のように強い国です。鉄はすべてのものを砕いてつぶしますが、その国は、打ち砕く鉄のように、先の国々をすべて粉々に砕いてしまいます。

紀元前 63 年に、ギリシアに代わってローマが世界を制覇しました。「鉄のように強い国」とあります。ローマはその反逆者に対する鉄のような破壊で有名です。ヨセフスも「ユダヤ戦記」の中でローマ軍がいかにその組織、訓練、指揮において優れていたかを述べています。このようにして、バビロンを始めとする異邦人の時代は、鉄の支配による空前の世界帝国となります。

ここで思い出していただきたいのですが、そのローマ時代にキリストが来られたということです。キリストが来られて、その命が断たれてしまう預言が、ダニエル書 9 章にあります。私たちは、福音書だけを見ますと、ローマがそれほど強権であることがなかなか分かりません。その最たるものが十字架刑なのですが、イエス様の十字架だけが注目されますが、当時、数多くの反逆者や凶悪犯が十字架刑にされていたのです。総督ピラトは、ガリラヤ人の献げ物に、ガリラヤ人の血を混ぜたことも書かれています。反逆する者には容赦ない鉄の制裁を与えるのです。

ユダヤ人たちは、ローマ時代をもってメシアが来ると思っていました。イエス様が現れた時代に

は、彼らの絶望感、ローマという異教の国、また人間の支配に対してとことんまで絶望して、メシア待望が熱狂的に受け入れられていたのです。そこにイエス様が現れました。そして、数々の奇跡を行われ、この方がキリストではないかという機運が生まれたのです。ところが、この方は、反逆者に対するのと同じ、十字架刑に処せられます。ですから、ユダヤ人にとっては、イエスは、キリストなんかではない、という失望、つまずきでしかなかったのです。けれども、主はよみがえられました！ それを目撃した弟子たちは、この方こそが来るべきキリストなのだと宣べ伝えたのです。

そして、鉄の支配の後には、鉄と粘土という状態になります。人の歴史において、イエス・キリストが来られ教会が誕生したという事実によって、人間の世界支配が瓦解し始めた、とすることができるのです。ダニエル書は、実に旧約から新約への橋渡しをする預言の幻です。そしてキリストが来られたことによって、ある意味で「終わりの始まり」と言えるでしょう。人間の支配の終わりが始まったのです。ですからイエス・キリストの教会は、神の国を霊的にこの地上に介入せしめる「世の光」であり「地の塩」であります。キリストの教会は、この世においてはちっぽけで、力がなく、卑しくさえ見えます。けれどもイザヤなどが語ったように、その貧しい者、弱い者が、そびえ立つ都を引き倒し、踏みつけるのです。「26:5-6 主は高い所、そびえ立つ都に住む者を引き倒し、その都を低くして、地にまで下らせ、これを投げつけて、ちりにまで下らされる。6 足がこれを踏みつける。苦しむ者の足、弱い者の足の裏が。」

## 2B 分裂した国 41-43

<sup>41</sup> あなたがご覧になった足と足の指は、その一部が陶器師の粘土、一部が鉄でしたが、それは分裂した国のことです。その国にはある程度までは鉄の強さもありますが、あなたがご覧になったように、その鉄は粘土と混じり合っています。<sup>42</sup> その足の指が一部は鉄、一部は粘土であったように、その国は一部は強く、一部はもろいでしょう。<sup>43</sup> 鉄と粘土が混じり合っているのをあなたがご覧になったように、それらは子孫の間で互いに混じり合うでしょう。しかし鉄が粘土と混じり合わないように、それらが互いに団結することはありません。

ここからが、ローマの後の世界です。ローマは滅びましたが、その影響を持っているのを「鉄は粘土と混じり合っている状態として形容しています。ダニエルは「分裂した」と言っていますが、紀元 364 年、ローマは西ローマと東ローマに分裂しました。西ローマは 476 年まで続き、その後、西欧の国々においてその影響は続いています。フランスでは紀元 800 年に、自らの支配権を「フランス・聖ローマ帝国」と呼びました。同じようにドイツは、指導者らが自分への称号を「カイサル」と付けました。私が驚いたのは、ギリシアやローマにある記念碑などが、そのままアメリカの首都ワシントン DC などで使われていることです。欧米には、至る所にギリシアとローマへのあこがれみみたいなものがあります。鉄の影響がまだ残っている状況なのです。

そして東ローマは 1453 年までビザンチン帝国として続けました。私はまだローマに行ったことが

ないですが、ビザンチン帝国の都コンスタンティノープルは、じっくりと見たことがあります。今のトルコのイスタンブールのことです。千年以上も続いたこの帝国は、次のように考えていたそうです。「彼らはそれを世界の終わりの日までつづく地上最後の帝国であると信じた。」「東ローマ帝国が常に追い求めたのは、神の国を地上に造り出す、ということであった。」<sup>1</sup>しかし、歴史を見れば、徐々に徐々に、この帝国の力は弱くなっていて、オスマン・トルコの勢力によって都が陥落し、イスラム勢力が支配するようになるのです。

しかし、東ローマの影響力は、ロシアに移っていきます。正教会の中心がなくなったけれども、それがロシアに動いたとして、自らを「第三のローマ」としました。そこでも国王は自らを「ツァー」つまり「カイサル」と名づけ、ローマ帝国の伝統を受け継いだのです。それがソ連になり、共産主義を通して勢力を拡大し、ソ連崩壊後もロシアはかつての強国の地位を得るべく動き始めています。

ダニエルは、7章でさらに詳しく足と足の指を解き明かしていきます。足の指は十本ありますが、ダニエル 7 章には第四の獣が十本の角を持っています。それが「十人の王(24 節)」であるという解き明かしです。けれども、鉄と粘土が混じり合わないように、互いに団結することはないとダニエルは言っています。「人間の種」つまり人間が作想的に世界を一つになるのですが、十人の王、あるいは支配の中で置かれ、それぞれは互いに団結することができない、という状態です。

これが、私たちがいま自分たちの時代に見ている世界です。グローバル化であります。これは近代から始まりました。欧米列強によってその波が極東にまで押し寄せ、日本はアメリカからの黒船によって開国を迫られました。そして間もなくして世界大戦です。もう一度世界大戦が起きました。まさにイエス様の言われた、「国は国へ、民は民に対抗する」時代であります。そして日本が連合軍に敗戦して、国際連盟が国際連合になりました。それぞれの国が互いに条約を結んだりして団結しようとはしますが、完全にはできません。共産主義者は、国際主義といって国々の垣根をなくして世界革命を起こそうとしましたが、失敗に終わりました。しかしその後、グローバル化は止まることなく、今に至っています。特に、ローマの発祥地である欧州において連合があります。通貨が統一されました。そして彼らはいずれ政治統合しようとしています。

### 3B 天の神の国 44-45

<sup>44</sup> この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。<sup>45</sup> それは、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのを、あなたがお覧になったとおりです。大いなる神が、これから後に起こることを王に告げられたのです。その夢は正夢で、その意味も確かです。」

<sup>1</sup> <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=9222>

ネブカドネツアルの見た夢のクライマックスです。これまでの人の像の輝きを、一つの石がことごとく打ち砕いて、全滅してしまいます。そしてこの石は全土を覆う大きな山となるのでしたね。この石による国が、人間の国に代わって世界を支配するのです。そしてこれは「永遠」です。これこそが神が支配される国、神の国です。

石が「人手によらずに切り出され」た(34 節)と教えています。キリストが神から来られた方であり、人の手によるのではないということです。この方が生まれたのは、聖霊によってみごもった処女マリアによってでした。

イエス様は、永遠に滅ぼされることない、天の神の国のことを思って、「マタ 6:10 御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。」と言われました。そしてユダヤ人指導者に対して、「ルカ 20:17 家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった」と、詩篇 188 篇のメシア預言を引用され、彼らのご自分を捨てることを言われました。しかし、「20:18 だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」と言われて、ここのダニエル書 2 章の幻を言及されたのです。

いかがでしょうか、ダニエルが知恵と力の神をほめたたえたように、私たちもほめたたえないでいられるでしょうか？ 捨てられた石が礎石となりました。私たちはこの石の上に霊の家として立っています。どんなにみすぼらしく見えても、いや、私たち自身がその高ぶりの心、魂がこの石によって砕かれて、主の前に出ています。そして人間の歴史の中で、いろいろなことが起こっても、世の中がどのようになっても、私たちは礎石の上に建てられている家です。イエス様は、御言葉を聞いて、それを行なう者は岩の上に建てた家のようなと言われました。洪水が来ても、崩れることはありません。そして、教会は福音にあって勝利し、天に引き上げられます。そして地上に神の怒りが下り、キリストが地上に現れます。教会も栄光のうちにキリストと共に現れます。そして、ここに描かれている御国の中に住むのです。

私たちの目は、粘土と鉄の混じり合ったような混沌としているところを見るのではなく、王を倒し、王を立て、時と季節を変えられるところの天の神の支配を見えています。ですから、「これがない、あれがない」という不満を鳴らすのではなく、「神がこのことをしておられる、あのことをしておられる」と、その御手を見て喜んでいくべきなのです。

### **3A ネブカドネツアルの賛辞 46-49**

<sup>46</sup> それで、ネブカドネツアル王はひれ伏してダニエルを拝し、ささげ物と芳ばしい香りを彼に献げるように命じた。<sup>47</sup> 王はダニエルに答えた。「あなたがこの秘密を明らかにすることができたからには、あなたがたの神こそ、神々の中の神、王たちの主、また秘密を明らかにする方であるに違いない。」

ネブカドネツアルが、直接、天の神の証しに触れた時の反応です。「あなたがたの神こそ、神々の中の神、王たちの主、また秘密を明らかにする方であるに違いない。」と言っています。これは当たっていますが、二つの点でまだ、信仰に至るに至っていないことが分かります。一つは、ダニエルに拝して、いけにえを献げるように命じていることです。異教の王、多神教の神々を拝む王ならではの反応です。新約聖書では、使徒ペテロに対して百人隊長コルネリウスが、ひれ伏してペテロを拝もうとした時に、「私も同じ人間です。」と言って断ったのを見ます。天の神を知らない人々は、このように創造主ではなく、用いられる器をそのまま拝む傾向があります。

次に、「あなたがたの神こそ」と言っていることです。ネブカドネツアルにとって、まだダニエルの神でありました。数ある神々の中で、神であると告白したのですから、自分の神にしななければいけません。そこまでは考えていないのです。彼自身が、自分の神とするまでには時間がかかりました。3章における、友人三人の証しがありました。そして4章で、ダニエルの夢の解き明かしを聞いて、その通りのことが起こりました。自分の身に及んだことが、自分の神としてほめたたえるようになりました。

<sup>48</sup> そこで王は、ダニエルを高い位に就けて、多くのすばらしい贈り物を与え、バビロン全州を治めさせて、バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官とした。<sup>49</sup> 王は、ダニエルの願いによって、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴに、バビロン州の行政をつかさどらせた。しかしダニエルは王の宮廷にとどまった。

ダニエルに全州を治めさせて、知者たちをつかさどる長官としています。ヨセフが王の次の総理大臣になったのと似ていますね。そしてダニエルは、三人の友人をバビロン州でつかさどる務めをさせていただけよう王に願いました。これが次の章の前置きになります。ダニエルは宮廷にいたので、金の像を拝む儀式に参加せずに済みましたが、友人はバビロン州の行政官になったので、彼らは参加を余儀なくされたのです。

私たちには、ダニエルのような啓示は与えられませんが、けれども、すでに与えられた啓示があります。このダニエル書にあるこれからの歴史に基づいて、先ほどの話したように福音書の背景となっていますし、イエス様は世の終わりについて語られましたし、黙示録で終わりの時の患難時代がどのようなものであるかを知る枠組みとなっています。今の時がどのようなものであるかを、あなたがたは知っている。パウロは、ローマ 13 章で話していましたが、使徒たちも、このような世の姿を信じた者たちに教えていたのです。